

## ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか？

### 6. 未完の理由 (第6号より続く)

「現実に行われる典礼にふさわしくない規模(バッハの『ロ短調ミサ』もそうであるが)のために意気阻喪してしまったのではないか。」(カルル・ド・ニ「モーツァルトの宗教音楽」)

ド・ニのこの見解に敢えて異論を挟む余地はないと思いますが、確かにモーツァルトは途中で長い中断はあったと想像されるものの、作曲の作業は初演を控えたザルツブルクにあっても続けられていましたし、結局は未完に終わった初演の後も作曲を続けていたとも言われていることから、密かに他日の完成を期していたとも考えられます。それは何のためであったか憶測の域を出ませんが、後に(1791年5月9日)その地位を得ることになるウィーン・シュテファン大聖堂副楽長の応募作品として温めておきたかったのかも知れません。あるいは「ロ短調ミサ曲」同様、もはや現世における演奏は考えず、演奏時間や編成などいかなる制約も受けずに、ただ自らの信仰告白と作曲技法の集大成として完成されたミサ曲を書き残そうとしていたのかも知れない、従って「意気阻喪」とはやや言い過ぎではないか、と言うのが筆者の思いです。

当然ながらザルツブルクの聖ペテロ教会におけるハ短調ミサ曲の初演(1783年10月21日)は典礼(ミサ)の中で行われました。コロレド大司教直接の支配下にあった当地の大聖堂に比べれば、演奏時間の制約は緩かったかも知れませんが、それでも聖体拝領を含め、入祭から閉祭まで続く祈り・書簡や福音書の朗読・詩編唱などの歌唱に加えて、もし「完成されたハ短調ミサ曲」が演奏されたとしたら、ミサの時間はどれほど長くなってしまうことか。その現実に気づいた時点でモーツァルトは完成形での初演を断念せざるを得なかったはずです。無論ミサ曲だけの独立した演奏会など、今と違って当時は考える事もできません。しかし Credo(信仰宣言)というよりミサ通常文全体の中心をなす Et incarnatus est(肉体を受け)、Crucifixus(十字架につけられ)、Et resurrexit(三日後によみがえり)の3部分の内、今日残されているのは Et incarnatus est のみというのは、いかにも中途半端な印象を受けます。少なくともこの3部分だけは完成させてほしかったです！

### 7. 未完のミサ曲をどう補填したのか

それでは本来なら通常文全部が作曲されたミサ曲が演奏されるはずのミサ典礼で、未完の分はどのように補ったのでしょうか。現代日本のカトリック教会で行われるミサにおいて、「信仰宣言」は通常会衆全員で唱えられます。Kyrie(あわれみの讃歌)、Gloria(栄光の讃歌)、Sanctus(感謝の讃歌)、Agnus Dei(平和の讃歌)は文字通り歌われる(日本語で)ことが多いです。しかし当時の教会では聖歌隊の役割としてミサ通常文はすべて歌われたと思いますから、例えば未完の部分はすでに作曲されたモーツァルトの他のミサ曲を用いたのではないか、あるいはグレゴリオ聖歌が唱われたのではないかといろいろの推測が出ていますが、いずれも確証がありません。いずれにしても当時教会音楽はあくまで「機会音楽」であり「芸術作品」ではなかったのですから、ミサ曲もいわば「あり合わせ」で良かったのでしょうか。

後世の音楽学者が「完成版」を作って出版までしていますが、何の意図があつてこのようなことをするのか、モーツァルトを直接に知らず、彼の依頼を受けたのでもない人間がそんなことをしても作品の価値は少しも上がりません。むしろ作品を傷つけるだけです。一体だれがシューベルトの

「未完成交響曲」を、ブルックナーの交響曲第9番(未完)を「完成」させようとするでしょうか。

かつてバッハの絶筆となった「フーガの技法」第19曲(3重フーガ)に欠けている基本主題を導入して4重フーガに仕上げる試みが行われ、20世紀ドイツの盲目のオルガニスト、ヘルムート・ヴァルヒャが自身の編曲をレコーディングしたものの、後にそれを「すべきではなかった」と悔いたという話があります。フーガの理論とバッハの作曲技法を研究すれば、4つの主題は理論的に結合可能であるといわれており、実際ヴァルヒャの「完成版」でも基本主題の結合は無理なく行われ(それ自体がすごいことですが)、スムーズに曲を終わらせることができます。

しかしバッハの天才は終結部に全く思いがけない形(転調やゲネラルパウゼ、即興的なパッセージなど)で出現することが多くの作品で知られていますので、すべての主題が結合された後いったいどのように曲を終わらせるか、そこはなんぴとといえども想像しがたいことです。それを考えてヴァルヒャは自分の行為を悔いたのではないかと筆者は推測します。

## 8. 教会音楽家としてのモーツァルト

さて、「ハ短調ミサ曲」成立に関わるお話は今回でひとまず終わりますが、前にも書いたようにザルツブルクの宮廷楽団を去ってからのモーツァルトが書いた教会音楽と言えば、この曲の他に「Ave verum corps(まことの御体)」と「Requiem(死者のためのミサ曲)」の2曲を数えるばかりです。ウィーン時代の彼は専らオペラ、交響曲、協奏曲、室内楽、ソナタなどの作曲に打ち込み、大成功を収めて時代の寵児となります。

しかし 1788 年、オーストリアが参戦した対トルコ戦争によりウィーンの物価は高騰し、戦費調達のための増税で人々の生活は圧迫されました。モーツァルトの顧客であった貴族たちは多くが出征し、あるいは領地に帰ってしまったため、彼は演奏会が開けなくなってしまいます。歌劇場の閉鎖やオペラに代わる演劇の進出もあってモーツァルトの収入は著しく低下し、生活の困窮と共に借金が増えてゆきました。

フリーランスであったモーツァルトはこの状況を脱するべく、安定した就職先を求めるようになります。1790年、新たに帝位に就いた皇帝レオポルト二世に、自分を次席宮廷楽長(当時の首席はサリエリ)に任命するよう請願しますが、聞き入れられませんでした。そうして翌年、すなわち彼の死の年の5月になってようやく獲得したのがシュテファン大聖堂副楽長のポストです。しかしその時モーツァルトに残された命はわずか半年あまりでした。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」も「レクイエム」もシュテファン大聖堂聖歌隊のために書かれたものではありません。結局彼は大聖堂副楽長としての実績をあげることなくこの世を去ってしまいました。

もしモーツァルトがあと10年生きていたらどんな教会音楽が書かれていたでしょうか、歴史に「イフ」はないとわかっていてもついつい思ってしまいます。せめて私たちは彼の残してくれた人類の宝物である音楽の一つ「ハ短調ミサ曲」を、現代日本における平和への祈りとして、心を込めて演奏しようではありませんか。

### 【後記】

2回にわたってハ短調ミサが未完に終わった理由を考えてみました。書き終わって筆者なりに納得していますが、皆様はいかがお感じになったでしょうか。次回はバッハとモーツァルトの関係についてお伝えしようと思っています。生きた時代と場所の異なる二人ですが、「天才は天才を知る」と言うところでしょうか。ウィーンでの「バッハ体験」のほか、モーツァルトはバッハゆかりの聖トーマス教会を訪問し、聖歌隊の演奏するモテットを聴いていますし、バッハの息子クリスティアンとは直接の関係がありました。(新井)